



第5回 富水地区まちづくり芸能祭



お気楽亭とんぼ：鎌倉を拠点に活動する落語サークル「お気楽長屋」の一員で、尊徳記念館にもよく足を運んで「いっぶく寄席」を開いています

十二月十日(日)タウンセンターいずみで「芸能祭」が開催されました。富水地区まちづくり委員会の地域振興・環境美化分科会が、毎年この時期に開いているもので、今回で五回目になります。演目は手品、朗読、歌、落語の順で三人の芸人さんが出演しました。

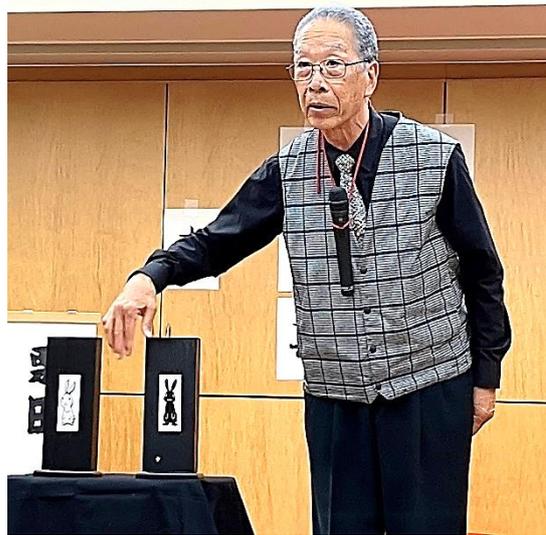
「抜け雀」で笑いを誘う

トリを務めたのは落語のお気楽亭とんぼさん。演目目は古典落語の「抜け雀」。小田原宿の宿屋に汚い身なりで泊まった若い男の話です。毎日酒を飲んで外に一歩も出ないこのお客。さすがに心配になった宿の主人が勘定の催促をしたところ、やっぱり一文無しの絵師だった。そこでこの男「宿

いらない。またも、ある日一人の老人がやってきて、「雀が休めるように」と言つて、止まり木と鳥かごを描いて去っていった。それから雀は飛び出し、中では帰ってきて、鳥かごの中でお殿様の大久保加賀守の耳にも入り、衝立は二千両の値が付いたが、約束だからと売らなかつた。時が過ぎ、ある日宿に立派な身なりの絵師が現れ

「反対にしたらっ！」

手品は、大井マジッククラブの栗田均さん。巧みな話術でお客さんを笑いに引き込みます。カードやスカーフを使つたマジック。筒から花を出したり、新聞紙に注いだ水が復活するマジックなどが次々に披露されました。途中、白ウサギと黒ウサ



話術も巧みな栗田さんのマジック

ギを交換するマジックをしたときです。「見ていたちびつ子から裏返しにした！」とタネがばらされ、お客さんも「愛嬌」と大笑いしました。

三十年来の友人

朗読は、映像が目に映るような稲葉あつ子さんの「ひさの星」。秋田の田舎に住む十歳程の女の子の話です。小さい子どもを助けるために自分が犬にかまれるような子でした。風雨が増して川に転落した政吉を助けて、自らは命を落としました。そうしてひさは星になりました。稲葉あつ子さんとお気楽亭とんぼさんは、昔、手作りの人形劇と一緒にやってきた三十年来の友人です。息の合った進行で、会場の皆さんと歌をうたいました。



「ひさの星」朗読